
間桐の最強の魔術師

幻龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間桐の最強の魔術師

【Nコード】

N0379Z

【作者名】

幻龍星

【あらすじ】

Fate/zeroのifの物語です。これは作者の、処女作しかも駄文なので、嫌と言う人はバックをおすすめします

第0話（前書き）

こんにちは、幻龍星です。作者は厨二なのでよろしくおねがします

第0話

「知らない天井だ」

なぜ、こんなことになっているのかと一言で言えば転生しました、トラックに事故られ、変な神様がチート能力あげるから好きな世界に行つてと、言われ、赤ちゃんプレイかよーーと思ったら死ぬ前と同じからだでした

ちなみにチート能力はあとで説明するぜ

とりあえずどこだか、確認しようと移動したら。

「ようやく起きたか、氷夜いつまで寝てるつもりじゃ」

えー！ー！ーまさかの臓硯なんで、まさかここ、間桐の家！ー！俺が甲子園の決勝でサヨナラホームランを打たれたピッチャーのような格好をしていたら。

「なにをしている氷夜、聖杯戦争のための修行の旅の支度はできているんか、貴様は雁夜と違って家を次ぐのじゃぞ」

俺がなんで間桐の家をつがなくちゃならないんだよ、いやまてよちよつと聞いてみるか。

「なあ、臓硯おれは何者なんだ」

つと聞いてみたほかの人から見たらなにこいつ、頭がついにいかれたのかと思うがこれは大事だ。何故なら俺が誰なのかがわかるだ。

「なにを、言っているのだ氷夜、貴様はわしの息子で、雁夜の弟じやぞ」

第0話（後書き）

臓硯の口調が分からない、いやまじで。次はキャラ説明です

主人公説明（前書き）

タイトルのとおりです。

主人公説明

名前 間桐 氷夜 ひょうや

性別 男 年齢 16

身長 180センチ

性格 結構マイペースであり、初対面でも好かれやすい性格、しかし戦闘時は、性格が反対になり冷徹無比な性格で自分以外には容赦がなく、殺すときも容赦がない、寧ろ楽しんでる様な感じ。
しかし、一度、焦ると止まらない。
ある人物だけには、戦闘時も変わらない。

特技 料理 口説くこと

容姿 ぶっちゃけ言うといケメン、細かく言うなら、いつか天魔の黒兔の紅 日向の片めがねとったバージョン。

チート能力 エンカウンター めだかボックスの異常、マイナスの能力 好んで使うのは不慮の事故

前世は交通事故でなくなり神様に頼んでこの世界に来た、モテモテで女遊びが激しい、原作の女性キャラもほとんど、喰われている。

氷夜は養子で間桐の家に来ている、氷夜が間桐の養子であることを知
っているのは臓硯のみで雁夜やほかの人たちは知らない

主人公説明（後書き）

自分は不定期で更新するのよろしく。

第1話（前書き）

すみません、前書きだるくなっ
たんで次からかけるかどうか

第1話

あれから六年した、いろいろあったりしたが結構楽しい日々だった、夜の出来事でも、旅をしている途中、衛宮の相棒、久宇舞弥に出会って一緒に出かけたりしたが。

あれこの人こんなキャラだっけと言うのが何回もあった、しかもなぜか惚れられてしまった、まあ俺的にはいいんだがな、しかも夜も、

「ああ／＼／」

なんて声を出すから興奮しちゃったぜ、終わって、別れる時も

「次会ったら、またしてくれ／＼／」

なんて言うからさ困ったぜ、まったくモテル男は辛いぜ。

しかし今はそんなこと言ってられない、もうすぐ聖杯戦争が始まるのだから、もう令呪ある触媒手にいれた。

そういえば、この前遠坂の次女が家に来た、まあしょうがないけどね、俺のことを間桐と知っているのは。臓硯だけほかは、ただの、

臓権の何かしか思っていない、桜が来るのは必然さ、兄さんも臓権に、刻印蟲をうえつけられていた、因み兄さんは修行中だ。

しかし、俺はイレギュラーな存在だが大丈夫なのか、原作の人物はしっかりと聖杯に出られるのだろうか、まあ俺の知ったことではないがな、

そうそう、俺の手に入れた聖遺物なのだがどうやら、誰の触媒なのか分からないらしい、しかしそれも、おもしろい、スリルがあつてまあいっざつて時は俺の異常で勝ち抜くか。

ついでに、女も喰わせてもらおう。

「氷夜よ、そろそろ、サーバントの準備を始めるぞ」

俺が考え事をしていたら臓硯が言ってきた

「ああ」

さてと、聖遺物も置いたしそろそろ詠唱をするかね。

「閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ、（満たせ）閉じよ（満たせ）閉じよ（満たせ）繰り返すつどに五度、ただ、満たされる刻を破却するー」

詠唱をしている時にふと思ったもしも原作の英霊を呼んでしまったらどうしよう、アルトリアをよんでしまったらどうしよう

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

だんだんと、魔方阵が光だし、それに対して興奮や期待がこみ上げてきた、しかし、不安もそれに伴いこみ上げてきた、自分は最強のサヴァーントを呼び出すことができるのだろうか？

いや、呼び出してみせる、そしてこの呪われた聖杯を、破壊しなければと言う思いがだんだんと膨らんできた。

「――誓いを此処に……。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者――」

そして、呪文の詠唱が終わりに近づくと、それに対するかのように魔力も循環してきた。

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれツ、天秤の守

り手よ！！！！」

最後の詠唱が終わり、魔方陣の中央で魔力があふれ出して来た、暴風の様な風が巻き起こされ、陣の内が外界と繋がった。

英霊と呼ばれるサーヴァント、が姿を現そうとしていた、俺はいつたい何の、クラスのサーヴァント、を呼び出したのか気になってしまふ。

そして、ようやくサーヴァントの姿が現された。

「・・・問おう貴方が私のマスターか？」

何！？、この綺麗な声に髪は金髪、容姿は男性にでも女性にでも見えるであろう。

「そうだ」

俺は思わず返事してしまった。

「サーヴァント、セイバー此処に召還に応じて、参上した」

やっぱり、セイバーだあああーーーーー

第1話（後書き）

まさかの、セイバーです、キリッグのほうどうしよう。

第2話（前書き）

もうお気に入り、50件突破しましたうれしすぎです、

しかし、もしかしたらこの小説消すかも、リアル友達に、「この二次元小説はないわー」と、言われたので

第2話

「おい、臓硯、聖遺物がアーサー王のだとは聞いていないぞ、どう言うことだ、答える臓硯!!」

どうも、間桐 氷夜です、ちなみに今、臓硯と話しています、セイバーは俺が作った料理を別室で食べています、なぜ。セイバーなのか、いや本当に原作早速ぶっ壊しちゃったよ、いやたしかに、原作壊したいなーと思ってたけど、そんな急に、壊したりしたくなかった、これじゃあまるで、どっかの小説の。

「その幻想ぶっ壊す」

見たいじゃないか、上〇さん見たいにしないでいいよ。

「ふん、何を言うかと思えばそれが、最強のサーヴァントの聖遺物を持ってきてくれと、言ったのは、お前ではないか、氷夜よ」

そつだ、確かに最強のサーヴァントの聖遺物を持ってきてくれといったが、アーサー王のじゃなくてもいいだろ。

うん？、まてよ、確か兄さんの聖遺物は、サー・ランスロットのだったはず、いや、まてまてもしかしたら違つかも知れないぞ。

「おい、臆硯、兄さんの聖遺物は、ランスロットのか？」

「よく分かったの氷夜、確かに、雁夜の聖遺物は、裏切りの騎士ごと、サー・ランスロットのじゃ」

ふん、そうか、見たいにクールに決めているのかと思うがマジで焦っている。

だって、あのランスロットだよ、円卓の騎士のセイバーの部下の！、しかも、裏切ってるからねあの人、原作でも狂化したランスロットが、セイバーと戦っているからね、この世界でもそんなことあったら、身内、どうして殺しあうんだよ。

「氷夜、食事がなくなっただので早く作ってください」

此処にきてまさかの、腹ペコ騎士王光臨か、俺は焦っていると言うのに、セイバーはマイペースだな、まったく、少し待ってもらおう。

「少しまってくれ、セイバー今は、話ごとをしているんだ」

これで良いだろ、騎士ならば待つてくれるはずと思っていたおれがバカだった。

「わかりました、では、少しだけ！待ちます」

少しを、強調してきたか、はぁー、しゃあない、食事を作りますかと、思い動き出した、俺だが一回臓権の方を向き、こう言った

「おい臓硯、良いか？次なめたこととしてみるよ、殺すぞ」

と言い、^{スカーデッド}致死武器を発動してセイバーの方に行った

食事を作りセイバーの所に行った俺、セイバーは、遅いですよ、見たいな感じをだしながら笑顔で食事を食べていく。

「こうして見ると騎士じゃなくて普通の可愛い女の子だな」

と、呟いたのだが、セイバーは聞こえたらしく。

「な／＼、何を言っているのです、氷夜／＼」

つと、顔を真っ赤にして慌てて答えた、しかし俺はそんなことは構わず。

「本当のことだよ、セイバー、いつもの君も可愛いけど、笑顔でいる君はもっと可愛いな」

見たいな事を言ったら、俺も微笑ん頭をなでながら、言ったらセイバーが

「き／＼騎士に可愛いなど言うのは止めてください、私はこの剣を抜いた時から女でわなく男で生きていくと誓ったのです！」

剣を見せ、顔を赤くしながら言っても、俺にはただの可愛い女の子にしか見えなかった。そして、そんなことを言う、セイバーに畳み掛ける様に言った

「分かったよ、でも、ほかの人には騎士見たいな感じで良いけど、俺の前では、普通の可愛い女の子でいてね」

っと、言ったらセイバーは、爆発寸前見たいに顔を赤くし、

「わ／＼分かりました、それが、氷夜の命令と言うならば／＼／」

なんて、感じて食事を俺たちは続けたのであった。

第2話（後書き）

いやーセイバーキャラ崩壊してるよ、氷夜も、設定を変えなければ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0379z/>

間桐の最強の魔術師

2011年12月2日18時47分発行